会員のひろば

不惑の惑い

札幌医科大学医師会

館農　　勝

母校の札幌医科大学が開学60周年（創基65周年）を迎えました。大学のエレベーターホールに掲示されている刊行物にある当時の写真を目にすると歴史の重みを感じます。そのような節目の年ということもあり、６月に行われた大学祭のテーマは、『還暦～rebirth～』でした。大学祭のホームページには、「60年という節目の年を迎え、これまでの伝統・実績を大切にしつつ、さらによいものへと再び生まれるという意味で『rebirth』という副題をつけました」と記されていました。学生のセンスの良さに感服し、気持ちを引き締めました。

還暦というと、2008年10月には、われわれ、札幌医科大学・神経精神医学講座の齋藤利和教授の還暦を祝いました。いつもエネルギッシュに大きな声で語り、頻繁に世界を飛び回り、夜には豪快にお酒を飲む齋藤教授は、教室の中で最もアクティブであり、今の時代の「還暦」は、干支がもう二回りぐらいしても良いのではないかと思ってしまいます。

同門の大先輩の中には、80歳を過ぎてから開業された先生もいらっしゃいます。元東京大学教授の故秋元波留夫先生が、オウム真理教の麻原彰晃の精神鑑定を行った際の年齢は100歳でした。精神科医という仕事は、定年があって無いようなものですが、年齢を重ねられてますますご活躍されている先生方には圧倒されます。

私はというと、「不惑」が間近に迫ってきました。しかし、卒後15年目程度となる40歳は、医師にとって、もっとも惑いの生じる時期であると思います。私の周囲でも、同期の開業や病院への就職が増えてきました。札幌医大44期の同期結婚となるわが家でも、家内が、2009年10月に「札幌はな発達クリニック」という児童精神科クリニックを札幌市西区に開院しました。多少、他人事とは思いながらも若干の手伝いをし、開業の大変さを実感しました。

私もそろそろ、今後のことについて考えなくてはいけないと思う今日この頃です。そのような思いで本誌をめくっていると、学術的内容や医療政策に関する記事に加え、開院情報や売買物件・求人情報、さらには税務相談と、「北海道医報」は中堅医師の将来設計における指南書でもあることを認識します。今後、これまで以上にしっかりと本誌を読ませていただきます。

イクメン医師のすすめ

北海道大学医師会

藤田　靖幸

婚姻率や出生率が年々低下している日本ですが、結婚を目標に積極的に活動されている若い男女は多数存在します。このような婚活女子の皆様が相手の男子を評価する際の一つのポイントが、結婚後や出産後に家事や育児を積極的にしてくれるかどうか、だそうです。

男女同権が叫ばれて久しい世の中ですが、一般的な傾向として、育児に関してはまだまだ母親が主体です。厚生労働省の調査では、父親が育児にかかわる時間は平均して週１時間とのことです。特に今年に入ってから、育児に積極的にかかわる男性は格好良い（＝イケている）という意味で「イクメン」と称されるようになりました。男女共同参画社会の観点から、政府も育児休暇の取得などイクメン養成政策を推進しています。

わが家には娘が一人いますが、このたび、とある事情により私が家事・育児を積極的に担うことになりました。すなわち私もイクメンの仲間入り！（外見的には全くもってイケていませんが）この新しい生活によって私の意識に起こった変化を３つほど述べたいと思います。

１．小児皮膚疾患を診る目が若干向上した。わが子に出現した発疹をじっくり観察し、対処法を考えると、皮膚科医の私にとって、その後の外来業務に役立つことが案外多いことが判明しました。n＝１を重視しすぎるのも問題ですが、わが家での経験をベースに加えることで、説明なども若干変化したような気がします。

２．専業主婦の方の辛さが少し理解できた（気がする）。目を離すことができず、心が安まることのない子供の面倒に加え、掃除、洗濯、調理、その他…が重なってくると、とても休息時間を日中には得られません。夜中に何度も起こされると、当直をしているかのような錯覚に陥ります。社会から取り残される不安も出てきます。

３．保育士の方々を尊敬するようになった。一人ですらてんてこ舞いさせられるのに、他所様の子供を何人も預かり、さらにさまざまなイベントを企画してこなし、時には親からの理不尽なクレームに応対する仕事を、笑顔で続ける保育士の皆様を心から尊敬いたします。

ここを読まれている先生方の中には、日々診療に追われ、育児への参加がなかなかできず、もどかしい思いをされている方もいらっしゃることでしょう（以前の私がそうでした）。時々でもイクメンを演じる、それが難しければ家族に感謝を示すだけでも、家庭の雰

囲気はだいぶ変わるものと思います。拙文が一つのきっかけとなれば幸いです。

医師会に望む、国民向けの情報発信を

札幌市医師会
札幌南一条病院
春原　伸行

ある講習会で、患者団体の幹部の方の講演を拝聴する機会がありました。そこで紹介された話です。『高齢の患者さんに手術が必要になり、主治医が息子に説明しようとしたが、休日しか行けないとのこと。仕方なく、休日に説明をしたが、その息子に“言い訳ばかり”と言われて大変めげてしまった。彼が別の席で“せっかく休日にムンテラしてあげたのに…”と愚痴ったそうです』『“してあげた＝上から目線”の医者がとても多いんです』と

講演内容はその団体の存在意義ですから批判はしませんが、振り返ってみて、われわれは自分たちの立場を理解してもらうべく努力して来たでしょうか。

昔は、医者も確かにごう慢なところもあったのでしょうが、それは家父長のような威厳と責任をもった存在であったように思います。開業医であった父も日頃偉そうにはしていましたが、真夜中でも往診し、曜日に関係なくご近所さんの最期を看取ったりしていました。患者さんとの関係は、家族のような非常に近い存在であったと思います。

小生の研修医時代（18年前）も、患者さんに“私の腕で採血の練習をしなさい”とか、“私の孫娘独身だけど、どう？”とか、“先生がしてくれるなら手術受けるけど、他の先生ならいやだ”とか、そんな場面ばかり思い出される、とてもいい関係でした。産科医だった頃は３日に一回は当直で、現在なら過労死レベルなのですが、辛いと思うことはありませんでした。しかし10数年ぐらい前から、関係は急に悪化し、苦痛に思う場面が増えたように思います。

医療不信やモンスターペイシェントの出現に関しては、医療の不確実性や医療環境の変化を、きちんと国民に説明してこなかったわれわれにも責任があると思います。

HBCのドキュメンタリーで、コンビニ受診に関して、『医療者が24時間働くのは当然のことだと思います』と発言していた高齢のご婦人がいました。命に携わる仕事ですので、緊急時に昼夜関係なく対応するのは当然だと思っていますが、そうではない行き過ぎた要求にも、小生を含め世間知らずの医者は批判を怖れ萎縮し、無理しながら応えてきたことが、先述のご婦人のような発言を生み出す一因となったのではないでしょうか。

医師会には、患者＝国民との関係をより良くするための情報の発信を積極的にしていただきたいと思います。一部の政治家と仲良くなるよりも、国民の理解を得、味方につける方が得策ではないかと思います。

岩見沢居住歴10年

岩見沢市医師会
岩見沢市立総合病院
上村　　明

1999年10月より岩見沢市立総合病院（内科）に勤務となり、札幌から岩見沢に転居しました。赴任後は医師住宅の２階に住んでいました。医師住宅は２部屋で一方にしか暖房がなく、暖房のない部屋は冬は寒く、灯油タンクも部屋の中にあり、灯油の追加は不便でした。それでも住めば都で比較的快適に生活をしていました。

縁があって2001年６月に結婚をして引越しをしました。引越し先は当時岩見沢には数少ない鉄筋３LDKのマンションの２階でしたが、暖房はガスで１つだけで、玄関を境に居住空間を暖める方法でした。暖房のない２部屋は物置になってしまいました。そこは水道料金のメーターが何戸かまとめて１つで測定され、基本料金が高いシステムだということを後で知りました。

2003年９月、第１子（男子）が生まれ、手狭になったので、同年12月、新築の鉄筋３LDKマンションの１階に引越しました。そこはJRの駅から徒歩６～７分と便利で、暖房は灯油で１つでしたが、戸を開ければ部屋が全部つながるので比較的暖かい環境でした。

2006年６月、第２子（女子）が生まれ、子供の数も増え、活動性も高まり、手狭になってきました。また冬に結露するようになり、転居を考えましたが、岩見沢の住宅事情ではこれ以上大きなマンションはなく、貸家や中古住宅も町の中心部には程度の良いものはなく、家の建築を決断しました。

建築場所を札幌にするか岩見沢にするか迷いました。子供も小さく、札幌から半単身赴任では妻の負担や自分の体力を考え、自分も妻も札幌に実家があり、岩見沢に家があってもいいと思いました。岩見沢の土地の値段は札幌の半分以下なので、思い切って岩見沢で建築することにしました。

交通の便を考えて、JR駅と職場の中間地点を探していましたが、どちらからも１km（徒歩10分）と調度良い場所があり、2008年７月に新居に移りました。新居はオール電化で冬は暖かいのですが、乾燥するので加湿器は必需品です。現在晴れの日は自転車で、雨の日や冬は徒歩もしくは車を使って、下の子を幼稚園に送ってから出勤しています。今年の７月には第３子が生まれる予定です。

岩見沢は札幌の郊外にあるような複合商業施設（ポスフールやホーマック、ツルハ、ユニクロ、イオンなど）があり日常生活には困りません。札幌からJRで特急

なら30分以内、バスでも１時間以内と交通の便は悪くありません。自然も豊かであり、都会の雑踏を離れて当院で働きたい医師の方は大歓迎です。

パリのおすすめ美術館

札幌医科大学医師会

北村　　寛

「パリに行ったら、どの美術館に行ったらいい？」

私はパリに３年間留学していたため、旅行予定の方から、よく尋ねられる。

学会出張のついでであったり、バカンスであったり、理由や目的はさまざまであるが、大抵はパリに滞在できる期間はせいぜい１週間であろう。この１週間をすべて美術館巡りに使うとすれば、その人は相当な美術好きで美術通のはずである。先の質問はあり得ない。

そこで本稿では、１日か２日程度美術館を訪問する予定の方を想定し、私なりのおすすめを記してみたい。ただしあくまで素人の知識であること、パリ市内にはとてつもない数の美術館があり、とてもすべてを網羅できていないことをお断りしておく。なおルーブル、オルセー、ポンピドゥの作品は年代別に違うといった基本知識や、パリ・ミュージアム・パスが使える美術館リストについては、ガイドブックやWEBサイトを参照されたい。

１．いわゆる名作を見たい

これはもうお目当ての作品を見て回るしかない。重要なことは、見たい作品をピンポイントで見て回ることである。はっきり言って、終日美術館で作品を鑑賞することはかなりの労力を要する。例えば午前中をルーブル、午後をオルセーに当てるプランもありだが、相当な疲労を覚悟しておいた方がよい。

まずルーブルはご存じの通り巨大な美術館であり、私は10回以上（12回までは数えていたが、その後は何度行ったか忘れた）訪れているのに、いまだに全てのフロアを制覇できていない。どうせ中途半端な記憶は後で消えてしまうのだから、フィールドアスレチックのような感覚で目的の作品をハシゴすることをおすすめする。

一方、オルセーは頑張れば１日で全て回れる。しかし日本の美術館に比べると、ここも十分に大きい。写実主義、印象派など、日本人に人気の高い作品が多いので、鑑賞する作品を絞るのは難しいかもしれないが、鑑賞後に体力を温存するつもりで回っていただければと思う。

ちなみにルーブルとオルセーはセーヌ川を挟んでお互い見える位置にあり、タクシーを使うほどではなく徒歩で移動可能であるが、この距離が微妙に長い。移動による疲労もある程度覚悟しておいた方がよい。なおルーブルは水・金曜日は夜10時まで開放されている。夜間の方が入場者数が少なく、鑑賞しやすいようである。

２．一つの美術館を集中的にすべて見たい

既にルーブルやオルセーに行ったことがある場合は、このような願望があると思う。多くのおすすめ美術館があるが、誌面の都合から５つのみ紹介する（残念）。

１）オランジュリー美術館

チュイルリー公園内にある。地上階はモネの睡蓮、地下はポール・ギヨームのコレクションが秀逸。飽きず疲れず、ちょうどよいサイズの美術館である。

２）ピカソ美術館（現在改装のため閉館中）

ピカソの天才ぶりを実感できる。定期的に特別展示があり、何度行っても飽きない。マレ地区にあるので、鑑賞後はファラフェルを食べて、ショッピングを。

３）ロダン美術館

ロダンのアトリエ兼住居（御殿）が美術館になっている。ロダン作品だけでなく、彼のコレクションも展示されている。多くの美術館が火曜日休館だが、こことオルセーは月曜日休館。庭がきれいなので、天気の良い日に訪れたい。

４）ギュスタフ・モロー美術館

小規模美術館の中で、個人的にとても気に入っているところである。展示方法がすばらしい。聖書の知識などの予習があるとよい。

５）モンパルナス美術館

エコル・ド・パリの画家が好きな方にはぜひ訪れていただきたい美術館である。質素でこぢんまりとした所だが、かえってそれが作品を引き立たせている。

３．パリ郊外に行ってみたい

こちらも厳選の３ヵ所を紹介する。レンタカーが一番楽だが、電車やバスでも行ける。旅行会社のツアーで訪れるのが無難かもしれない。

１）バルビゾン

ミレーなどのバルビゾン派自然主義の好きな方におすすめ。少々観光地化された感もあるが、ある程度便利な方がよい場合もある。

２）ジヴェルニー

モネの家と庭園を見たい方はぜひ。「睡蓮」の世界が広がる。

３）オヴェールスュロワーズ

ゴッホが描いた有名な教会があり、ゴッホ兄弟の墓もある。ピサロが好きな方はポントワーズにも立ち寄るとよい。

最後に一言。美術作品など、人それぞれ自由に鑑賞すればよいのだが、特に絵画の場合、画家が何を目的として描いたのか、描かれ

ているテーマは何か、クライアントが何を望んだのか、などが分かっていると、より作品の理解が深まる。従って、ガイドブックでも、インターネットでも、オーディオガイドでも何でもよいので、作品や作者の情報を集めることをおすすめしたい。また西洋美術には聖書に記された逸話を題材とした作品がかなり多いので、「聖書入門」的な本などである程度の知識をつけておくと、美術館巡りがより充実したものになるだろう。

故郷・原点への赴任の旅

室蘭市医師会
市立室蘭総合病院
土肥　修司

地域医療の崩壊が声高に叫ばれて数年になる今年（2010年３月）、私は定年を迎えた。大学病院での終わりは、地域経済の破綻、地方自治体病院の経営破綻、若い医師達の大都市圏への移動、専門医志向の大学医育機関の医師たち、大都市圏の医師達の鎮静化しない金銭志向、などさまざまな問題が彷彿してきたが、あまり心を動かされることなく定年を迎えることができたのである。

だが、地方からの表現過剰で断片的なニュースには、特に北海道からのものには、その地が40年もの昔、医師として学んだ故郷であったから、心を揺り動かされないわけはない。地域医療への「若い医師達の志」はどうなっているのだろうか、という想いも胸を駆け巡ってもきた。十分に年老い、くたびれてはいるが、28年ぶりの故郷への赴任の旅には、私なりの希望とこだわりとがあった。

最終講義を終え、３月末最後の会議を終えたその日、岐阜・長良川岸のホテルを出発した。中央道を経て諏訪湖畔で子供たちと一泊し、東京で両親に会い、首都高速を経て東北自動車道で青森へ、そして津軽海峡フェリーを経ての室蘭入りは、思い描いた通りで順調であった。子供たちの心配をうけ、高価な温泉宿で遺言状を書かされての旅立ちであったが、30年間の大学生活から解放されるには十分に無心となることができた時間であり、自分の駆け出し時代へのタイムスリップの旅となった。

マイアミ大やエール大学でのレジデント時代の記憶や、アメリカ大陸縦断と横断の車旅行も重なってきた。室蘭から千歳への高速道路では、決まってアメリカ東海岸ボルチモアーからニューヘブンの高速道路を思い出すようになった。この地は、地図上では大都市が並び連なった地域だが、車で走ってみると全く人家は見えず、大木が生茂り広大な緑が続き、ジョンズ・ホプキンス大やエール大など躍動感に溢れる学問の府がいくつも点在しているのだ。

若い医師としての駆け出しの時代の診療の記憶も蘇った。卒後研修などなかった時代であった。函館・旭川・釧路と麻酔科医として勤めた病院では、いつも悩みながら患者の治療にあたった。それゆえ、さまざまな記憶が蘇り、患者やその家族の顔までもが、生き生きと思い出されたのである。彼らから教わった言葉もはっきりと蘇ってきた。

腫瘍が脳幹に及び、人工呼吸でしか生命を維持できない５歳の少女のベッドサイドで、長くつらい沈黙の後、母親の口から「後は静かに、静かに…、ありがとうございました」と噛みしめるように語られた言葉から、深い悲しみとともに、豊かな感性と心深い思考とが伝わってきた。言葉なくして思考はありえない。思考なくして人格はありえない。だが、言葉はどんなに短くてもよい、ということを学んだのである。

岐阜からの車の小旅行は原点回帰の旅となったのである。

そして、新任地での３ヵ月間にみたものは、年齢の異なる向学心に燃えた医師達が、知恵を出し合い、得意、不得意を補いつつチーム医療を実践して患者の診療にあたっている、昔と変らない医師達の姿であった。

地域医療の現場には、病をもった一人の患者を中心に、さまざまな人々と協力して病を取り除こうとする、誠心誠意努力する医師がいる。そして、医師としての志と熱意とを失うことなく、患者を尊重し、診療に邁進し、医療技術を研き、研修医を指導している指導医もいる。今、周辺にある「医療の崩壊」などは些細なことだ、と私の気持ちを大きくしてくれる。地域医療も今後一層、国の経済のグローバルな影響を受けるに違いないけれど、そんなことは取るに足らない懸念のように思われもする。

故郷への原点回帰の旅から、若さと希望とをもらったような気がしている。

鉄道の愉しみ

函館市医師会
市立函館恵山病院
水関　　清

世に鉄道好きと呼ばれる人たちがいる。この世界も専門分化の波に洗われはじめ、時刻表・駅弁・運賃・列車・切符・鉄道備品など、興味をもたれる分野が細分化してきている。

時刻表と運賃・切符は、かつて切っても切れない関係にあったものである。目的地と経路を少し工夫するだけで運賃の割引という果実が得られた、国鉄時代の一般周遊券の購入は、それら知識を試される重要な場であった。一般周遊券は、国鉄からJRへ移行後もしばらくの間販売されていたが、現行の周遊きっぷの発売を機に全廃された乗車券で、オーダーメードの周遊券とも呼ばれた。

オーダーメードという名の示すとおり、ほぼ全国くまなく設定さ

れた周遊指定地を原則として２ヵ所以上まわり、国鉄線を201km以上利用すれば、あとは船・飛行機・バス・私鉄などさまざまな交通機関を利用して、連続した経路で出発地に戻ってくればよい、という乗車券であった。これらの条件を満たせば、国鉄運賃は２割引、飛行機などの運賃は１割引となり、有効期間も１ヵ月間と長かった。割引運賃といえば往復割引がほとんどだったこの時代、片道だけの飛行機利用でも運賃１割引は特に魅力的で、うまく旅程に組み込むことは、移動時間の短縮と旅費の節約というふたつの実益をもたらすものであった。

不思議なことに周遊券は、国鉄の販売する切符であるにもかかわらず、購入できるのは、交通公社など民間の旅行会社の窓口に限られていた。旅程作成に一定程度の知識が要求され、国鉄窓口での発券作業の手間を避けたためか、詳しい事情は判らない。さらに実際の旅程作成と周遊券購入にあたっては、時刻表に掲載された情報だけでは不十分なことも多かった。特に、「経路が連続しているか」ということと、周遊指定地へのアプローチとして組み入れた交通機関の適否とがよく問題になった。

「連続した経路」は、一見すると簡単なようで奥の深い問題であった。目的地へ至る経路上の単純な寄り道の場合はまだしも、見方によっては迂回したような経路にみえる場合などが問題とされた。「周遊指定地へのアプローチとして組み入れた交通機関の適否」の場合は、事情がやや異なった。国鉄以外の交通機関を周遊券の経路に組み入れようとする場合、それら機関と国鉄との間で通過運輸契約という約束をしていることが必要とされた一方で、時刻表のほうでは、紙面の制約等のためか、情報のすべてが掲載されているとは限らなかった。交通公社本社のほうには、国鉄からの通達が届いていたものの、末端の窓口社員にまでは徹底されておらず、しばしば問題が生じた。地方都市の窓口と本社発券担当者との間でやり取りをして不都合を修正し、当初の希望にほぼ沿うような周遊券を手にするまでには、しばしば数週間を要した。

こうしたやり取りは、出張や旅行等、周遊券を依頼する必要が生じるたびに行われ、そのたびに新しい鉄道関連知識の発見があった。周遊券構成の必要条件である「連続した経路」とは、実際にはどういうもので、周遊指定地への妥当なアプローチ経路として認められる交通機関の組み込み方はどんなものか、など、さまざまなことを教わった。

徐々にコツが飲み込めてくると、さらに複雑な経路を作ってみたくなるのが人情である。自分でもどうかなと思う経路で周遊ルートを作った時には、当然のように本社担当者から問い合わせが返ってくる。そうした担当者とのやり取りにやや時間はかかるものの、その都度きちんと発券されてくる。最初のうちは仲介してくれていた地方窓口の担当者も、気を利かしてくれたのか、窓口を飛ばして直接その担当者と交渉することを許してくれるようになった。その場合には、やり取りが適切で短い分だけ修正後の発券も早くなる。時には、自分が気づかなかったような妙案を教えてくれることもある。自分の知識の集大成が試され、どの世界にも専門家がいることを教わった場所のひとつは、交通公社の窓口である。

＊＊＊＊＊

旅程プラニングという知的活動と、運賃割引という実益とが融合した時刻表と運賃の世界を離れて、鉄道の魅力というものを、あらためて考えてみる。いうまでもなく、鉄道という乗りものは、線路の上しか走れない。自動車のように、場合によっては道とはいえないようなところにまで、自由に行くことはできない。あらかじめ決められた時間に、ダイヤグラムという名の予定表どおりにきちんと運行される乗り物である。経路上で途中下車は出来るものの、自動車のように気が向いたらわき道に入ってまたもとの経路に戻るというわけには行かない。地盤の制約や、勾配の制約もあり、風光明媚な景勝地のごく近くまで行くわけにはいかない。

その魅力は、鉄路という線の上でしか動けない制約にあるような気がする。線上の移動ゆえの制約が要請する列車運行ダイヤであり、時間的制約が要請する特別急行や急行などの優等列車であり、夜行列車ではないだろうか。優等列車を先に通すために普通列車のダイヤに待ち時間があり、上り下りの優等列車を少しでも早くすれ違いさせるため、単線区間では信号場が設置されるのである。

制約とは、裏を返せば約束そのものである。時刻表に示されたその時間どおりに、きちんと目的地に到達できる、という約束がもたらす安心感は、道路事情に左右される割合の大きい自動車にはないもののひとつだと思える。

路盤の制約は、地形図を見ると納得できる。特にリアス式海岸を走る鉄道の場合、設計者がその要請に応じようとした苦労のあとが顕著である。海沿いの町から川沿いを遡り、半島基部を横断したあと反転し、また隣り合う湾の入り江に開けた町に駆け下りる鉄路は、岩手県の三陸沿岸に見られる。川は交通路の母である。川の流れが、気の遠くなるような歳月を費やして山肌に刻み込んだ空間があるからこそ、長いトンネルを掘らずとも、道路や鉄道が敷けるのである。

根室本線では、帯広を過ぎた列車は幕別を経て、池田から浦幌にかけての区間では十勝川に、さらに上厚内へかけては浦幌川に寄り添いながら釧路を目指す。江差線では、１両だけの編成の列車が木古内から上ノ国への分水嶺を越えると、天の川沿いに駆けくだって、江差を望む海岸線に至る。宗谷本線も、天塩川とぴったり併走する

鉄路である。列車は、名寄市外を抜けると音威子府を経て幌延に至るまで、天塩川右岸の段丘の上を坦々と走る。冬の朝、結氷した川面と段丘の上とは積雪で区別がつかず、雪原を疾走しているような錯覚を覚える区間である。

本州には、名だたる急流に沿って敷設された鉄路が、あちこちに見られる。長野県辰野町から愛知県豊橋市を結んで伊那谷を縦貫する飯田線はその好例である。飯田線は川沿いに敷設された全長195.7kmのローカル線である。まず、諏訪湖から流れ出る天竜川に沿って静岡県境の佐久間ダム付近まで走り、ダム建設に伴って建設された迂回新線が穿つふたつのトンネルのあたりを分水嶺として豊橋側に抜けた後は、豊川に沿って走る。

特に天竜川は急流で、谷を押し広げるようにして蛇行する。線路も、それに寄り添うように蛇行する。流れが川の向こう岸を洗う箇所では、こちら側の岸に若干の畑や人家があるものの、流れがこちら側に向かうところでは、切り立った崖になる。谷の深いところを走る列車の車窓から対岸を望むと、崖の中腹に張り付くようにして駅のホームがあり、それに続く小径は吊り橋を経て嶺の上へと伸びているのが判る。脚下には、流れ下る激流を見下ろす箇所が連続する。

川幅が広がり河岸段丘をかたちづくっている区間でも、線路の蛇行は変わらない。段丘を深く刻む幾本もの支流が本流に注ぐ箇所では、線路は支流に沿って流れを遡り、谷が浅く細くなるところで流れを跨ぎ、反転して対岸の段丘に渡ることを繰り返す。

＊＊＊＊＊

線上の移動という鉄道の持つ制約は、別の楽しみと結びついた時、愉しみに変わる。長時間乗車中に必ず生じる空腹という生理的欲求と途中下車の制約とを、うまく調整したもののひとつに駅弁がある。地元の食材を、地元ならでの工夫で調理した駅弁の存在は、鉄道旅行の楽しみのひとつである。最近では、やや高価ながら、ユニークな名前と豊富な品揃えで名を上げた、異色にして抜群な駅弁も現れてきた。

当時３歳だった私の三男はしばしば父の書斎に忍びこみ、本棚の鉄道雑誌を取り出しては畳の上に並べ、回らぬ舌で表紙の文字を拾い読みしていた。なかでも「汽車旅と食」と題された特集号が特にお気に入りで、表紙には列車を背景に駅弁を売るおじさんが写っていた。

来る日も来る日もこの雑誌を開き、「これなあに」「あれなあに」を繰り返した。おかげで、森駅の「いか飯」、横川駅の「峠の釜飯」、富山駅の「鱒のすし」、明石駅の「ひっぱりだこ飯」、小淵沢駅の「元気甲斐」など、写真をひと目見て解説できるまでになった。自然な流れで、食べてみたいと言い出すようになった。

当時住んでいた森町の名物駅弁「いか飯」は、製造元で簡単に手に入った。「峠の釜飯」も「鱒のすし」も「ひっぱりだこ飯」も、物産展で購入できた。入手困難な「元気甲斐」は、新宿駅地下連絡路で店を開いている駅弁屋さんにお願いして、小淵沢駅で積み込んでもらったもののひとつを、東京出張の折りに手に入れ、飛行機で自宅に持ち帰った。憧れの駅弁を目の前に置かれた三男は、包み紙を破かんばかりの勢いで開いて弁当を食べ、雑誌で仕入れた蘊蓄を披露してくれた。いか飯の丸々とした姿、釜飯の益子焼の釜、樽と笹との間からのぞく鱒の色の鮮やかさとすし飯の甘酸っぱさ、たこ飯の香ばしさ。元気甲斐の栗の煮物、くるみやシメジの入ったご飯とそれを包む朴葉。噂に違わず美味しい。だけど、何か物足りなくて、三男と顔を見合わす。

列車の振動が足りない。機械油の匂いもしない。車窓風景も見えない。やっぱりこれらがないと、旅の気分という、駅弁に隠された最高の隠し味が活かされないのだ。そう思った父は、三男に提案した。

「特急に乗って、駅弁を食べないかい？」断じて「駅弁を食べに、特急に乗らないかい？」ではない。二つ返事でOKした三男。

心配そうな妻の顔を尻目に、当時４歳だった三男と父とは、早朝出発した。目指すは、奥羽本線秋田駅の駅弁「秋田まるごと弁当」。秋田の食材を豊富に取り入れ、うまい駅弁を食べてもらおうという精神が漲った名物駅弁のひとつである。特急を乗り継いで、午後早くに秋田駅に着き、駅弁ワゴンに直行。あいにく売切れ。改札口近くの売店に行くが、ここも売切れ。三男の手前慌てず、代案であった「おばこ弁当」を指名したが、これも売切れ。先程発車の新幹線の団体が大口購入したとのこと。16時に追加注文分の弁当が売り場に届くとのこと、その時間では自宅に帰れなくなってしまう。

後ろ髪を引かれながら秋田駅を発ち、途中の大館駅の「比内鳥弁当」を目指す。大館では親切な駅員さんに、販売元まで問合わせていただいたが、これもすべて売切れ。緊張の糸が緩んでみれば、親子ともども昼食抜きでの駅弁追跡。湧き上がる後悔の念とともに、空腹感がこみ上げてきた。

駅近くの商店で購入した幕の内弁当を手に、親子ともうちしおれて普通列車に乗り、青森を目指す。早速弁当を開く。黒ゴマをまぶした結び飯の中央には梅干、卵焼・カマボコ・焼魚と干椎茸と栗の含め煮が並んだ、お馴染みの姿である。三男はと見ると、まず梅干をカリカリと噛み、ご飯、焼魚、卵焼と、次々と食べていく。苦手な椎茸もペロリとたいらげてしまった。

「パパ、美味しいね。」

駅弁の美味しさって何だろう。それは旅の気分と車窓風景、そして一緒に食べた人の表情と駅弁を口にしてこぼれ出たひと言。

私の駅弁は、いつもこの三男のひと言の味がする。

暑い夏の思い出

札幌市医師会
札幌医科大学
菊地　浩吉

毎年お盆になると敗戦の年を思い出す。樺太庁立真岡中学校１年生、満13歳だった。今回は私事で恐縮だが若い世代にその思い出を語っておきたい。

昭和20年８月15日、ポツダム宣言受諾、無条件降伏。樺太でさえ暑い日で、カンカン照りの校庭で整列して直立不動、頭を垂れて勅語をラジオで聴いた。自宅近くの小学校のグランドだったから、夏休み中だったと思う。受信音が悪く、天皇陛下が何をおっしゃっているのか分からず、多分死ぬまで戦えということかな、と思っていたら、大人が言うには負けたらしいということだった。どんな気持ちだったか、今ちょっと思い出せない。

父は天皇陛下の言う通りに大勢に従うという態度で、私たちにはあまりくどくど言わなかった。ともあれ終わったという気持だったのであろうか。なるようにしかならないという感じであったが、子供たちだけは何とか生かさなければと思ったらしい。

戦争は終わったはずなのに、沖でソ連の潜水艦（と思う）に汽船が沈められた。これはたまたま高台にあった教員官舎の縁側から海を見ていた時に目撃した。翌日、中学校に登校したら、あれほど威勢のよかった中学校の配属将校が悄然として書類を燃やしていた。軍刀は身につけていなかったと思う。校庭に集まり校長の訓示を受けていたらソ連の戦闘機が飛来して機銃掃射され、われ先に防空壕に飛び込んだ。誰も死ななかったところをみると、兵隊ではないと見て威嚇射撃したらしい。この年４月にソ連は一方的に日ソ不可侵条約を破棄し、８月８日に宣戦布告をしていたのだ。

女子供を優先して北海道に引揚げさせることになり、８月18日夕、父を残して母子（母は親戚から預かった病気の亜子を背負って）５人、着のみ着のまま逃げた。私は年齢からいうと、残留ぎりぎりだったが、亜子が重体であったということで、特例として引き揚げを許可され、虎の子の顕微鏡（ドイツ製と聞かされていたが千代田だったかも知れない）を背負って樺太を後にした。日本は科学で負けた。これからは科学を勉強しなければだめだという心意気だったが、これは後に飢えに迫られコメと交換したから、初めからコメを背負って来た方がてっとり早かった。

女子供を満杯にした‘はしけ’を漁船に引かせて真岡港から脱出し、24時間かけて稚内港に着いた。これはかえって幸運で、立派な引き揚げ船にまわされた人達は、ソ連の潜水艦に攻撃され船が沈められ、避難民、乗員のほとんどが死んだ。

金子俊夫氏の「樺太一九四五年夏－樺太終戦記録、講談社」によれば、小笠原丸1, 403トンでは581人（生存者62人）、泰東丸887トンでは667人（生存者113人）、第二新興丸2, 500トンでは推定400人（生存者3, 100人）、が死亡または行方不明である。いずれも８月22日、留萌あるいは増毛沖と記録されている。このうち第二新興丸は大破したが、沈没を免れ留萌港にたどり着いた。戦争は終わって白旗を上げている引揚船を攻撃するとは、お人よしの日本人は全く考えなかった。

私たちが逃げた直後、８月20日早朝、真岡町ではソ連軍の艦砲射撃、上陸があり、「地獄絵図真岡町」と表現される惨劇がおこった。白旗を掲げた停戦軍使は問答無用で射殺され、住民には容赦ない銃砲撃が浴びせられた。兵隊ばかりでなく一般人が多数殺された。９人の電話交換手が自殺した（氷雪の門）。その時の惨状は父が引き揚げてから折にふれて聞いた。

私の家は小高い丘の上の真岡第二国民学校の近くにあったが、父は隣近所の人達と防空壕に身をひそめていたという。かなりの時間がたってから、壕の入口が開けられ、何か大きな喚き声がした。かなり躊躇したがややあって父は真先に両手を上げて外に出たという。もう一呼吸遅れたら手榴弾を投げ込まれたかも知れない。慌てたので梁に頭をしたたかぶっつけて、その時戦闘帽が脱げた。それがまた幸いしたのかも知れない。銃を突き付けられ、一時は死を覚悟したが、撃たれることもなく塩蔵倉庫にぶちこまれ、飲まず喰わずで２日ばかり留置されたという。

死体の片付けなどで使役された後、自宅に帰ったが、家の中は荒らされ、私が飼って乳絞りをしていたヤギの首が転がっていたと言う。ソ連兵に喰われたらしい。この時父が死んでいたら、私の人生はまた大きく変わっただろう。

後年、真岡中学の先輩の道下俊一先生の妹さんである道下匡子さんの「ダスビダーニャわが樺太」が河出書房から出版され、ドキュメンタリー文学の傑作として第２回蓮如賞を受賞した。私は道下先輩からこの本を送っていただいたが、この中で語られている出来事はほとんど父の話の通りであった。父の話で組み立てていた真岡町の修羅場が、土地、人の固有名詞も生々しく再現され、読んで涙が止まらなかった。前述の金子俊男「樺太一九四五年夏」にも詳しく記載されている。

当時は中学生も戦闘帽、ゲートルであったから兵隊と間違われたはずである。軍国少年だった私も、残っていたら抵抗して殺されたかも知れない。わずか１、２日の違いで運命は大きく変わるものだと知った。

後年（2003年）、私は札幌市の姉妹都市協会の会長としてノボシビルスク訪問の途次、樺太の豊原（ユジノサハリンスク）に寄った時に

旧樺太庁を転用した博物館を観て、当時のソ連の、留萌沖から千島列島にかけての戦略をまざまざと知ることができた。引揚船を撃沈したソ連の潜水艦はその後、択捉、国後に向かったらしい。スターリンは対日戦争参入のわずかな期間ばかりでなく、終戦後もできるだけ多くの分け前を取るつもりだったのだ。

北海道では洞爺村の精吉伯父を頼って行けといわれていた。都会はおそらく食料難だろう、田舎ならイモでも食べて生きていける。しかし頼りの精吉伯父は私達が着く直前に胃潰瘍で死んでいた。未亡人の伯母が引き取ってくれたが、なにしろ今数えてみると、真岡からのわれわれ５人を含めて計10人も転がり込んだのだから、大変だったと思う。可哀想に亜子は到着して直ぐに死んだ。後年医学部に入ってから、あの症状はHirschsprung病だったと思い当たった。暑い夏だった。

私は戦争に負けたのだから学校どころではあるまいと、毎日洞爺湖で泳いだり鮒を釣ったりしていた。マッカーサーがコーンパイプをくわえて厚木飛行場に降りたこと、ミズリー号で重光全権が降伏文書に調印したことなどを新聞で読んだが何の感慨もわかなかった。

しかしいつまでも未亡人の伯母のお世話になるわけにもいかず、室蘭のもうひとりの伯父（父の長兄）を頼ることにした。晴吉伯父は国鉄職員で剣道８段の猛者だったが、その時は喉頭結核で病床にあって気息えんえんだった。今さら学校に入ることもなかろうと思ったが、長男でもあるし、ということで、室蘭中学（旧制）に編入してもらいに行った。しかし急に逃げてきたので、状況証拠はあるが、正式な在学証明も転校証明も無い。後に北海道の教育主事になった磯貝芳司先生は､「こんな時代にそんなもの（証明書）はいらない。心配せずに勉強しなさい」と言って編入してくれた。

室蘭の晴吉伯父は間もなくかっ血して死んだ。東京の良吉叔父も２、３年後、肺結核でかっ血死した。この前後には直接戦争による死亡ばかりでなく、伯父達、従姉妹など周りの人達が数多く、現在ならば簡単に治せるような病気で次々に死んだ。遺伝子はかなり共通しているわけだから、私が生き永らえていることに、戦後の著しい医学の進歩、環境の改善を思わずにはいられない。思えば危ない橋を渡り、ほんのわずかの時の差で良い時代に生きたものである。

ちなみに敗戦のこの年の日本人の平均寿命は男子が23.9才、女子が37.5才と記録されている。男性の平均寿命が短いのは大戦争敗戦の末期、直後で当然で、私より３、４歳年上の若者が多数戦争で殺された。女性平均寿命も極めて短いことは、この年の生活がいかに悲惨であったかを示している。本当に世界最低、史上最低の時代だった。

個人の歴史にもifは許されないかも知れないが、私の場合は生まれがほんの２、３年差、樺太脱出の１、２日の差で生き延び、戦後のよき時代に生涯を送ることができ、齢喜寿に達することができたのは幸運であった。

2009年の日本人男性の平均寿命は世界第５位､79.59歳である。人生茫漠、一炊の夢。人生にはいかんともしがたい時の運というものがある。私たちは、おのれに対して悔いのないように、その時々の最善を尽くすしかない。

電子メールによる会員への情報提供について
－メールアドレスの登録－

◇情報広報部◇

本会では､インターネットを利用し､電子メールにより緊急性の高い情報を、会員の皆様に送信提供しております。対象は当会の電子メールアドレス利用者全員と他プロバイダの電子メールアドレスをお持ちになっていて、本会にアドレスを登録している会員です。

他プロバイダの電子メールアドレスの登録につきましては、随時受け付けておりますので、是非ご登録いただきたくご案内いたします。

●電子メールアドレスの登録方法

電子メールで、ご氏名、登録メールアドレスを明記のうえ、下記宛お送りください。

・申込先メールアドレス：**add@m.doui.jp**